

令和 6 年度 学校評価中間報告書（目標設定・実施結果）

	視 点	4 年間の目標 (令和 6 年度策定)	1 年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3 月 7 日実施)	総合評価（ 3 月 31 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	①生徒の進路選択に適合する教育課程を編成し、組織的な授業改善に取り組む。 ②論理的思考力、情報活用能力や他者と協働した問題解決能力を身につけさせる授業を実践する。	①組織的な授業改善に向けて校内研修を実施し、指導と評価の一体化を推進する。 ②5 年間取り組んできた「論理的思考力の育成」について、本校の指導の基盤として定着させる。	①授業改善に向けた校内研修を実施する。 ①授業中に評価の場を設定し、「指導と評価の計画」を実践することができたか。 ②教科指導や探究の時間、学級活動など、あらゆる場面で生徒が論理的な思考を意識・活用できるような授業を展開する。	①授業改善に向けた校内研修を実施できたか。 ①「指導と評価の計画」を実践し、授業中に評価の場を設定することができたか。 ②生徒が論理的思考と情報活用能力を発揮し、他者と協働して問題解決ができたか。	①「指導と評価の計画」を作成し、授業中に評価の場を設定することができた。 ②プログラミング教育に関する研修（すみプロ）を 4 月から 6 回実施した。また、11 月 6 日には 2 学年 9 クラスで公開研究授業を実施し、様々な意見や助言を頂いた。研究協議等により授業改善の一助とした。	①「指導と評価の計画」について県からの指摘事項をふまえ、最終学年分まで作成した。 ②授業の振り返りや生徒へのアンケート等により、プログラミング的思考力の定着が見て取れるが、今後どのように取り組んでいくかが課題である。	①生徒のニーズに沿った指導が行われていると感じる。主体的に考えることを実践する授業を今後も継続してもらいたい。 ②プログラミング的思考力を向上することは、社会生活の上でも重要である。大学入試等でも必要な能力であり、生徒のアンケートからも結果が出てきているのではないかなと思う。生活全般で活用できるように、今後の方針を考えてもらいたい。	①「指導と評価の計画」を作成し、授業中に評価の場を設定することができた。また、「指導と評価の計画」について県からの指摘事項をふまえ、最終学年分まで作成した。 ②プログラミング教育に関する研修 6 回実施し、11 月には 2 学年 9 クラスで公開研究授業を実施し、様々な意見交換を行った。それらの結果と生徒へのアンケート結果を踏まえ 5 年間の取組のまとめを行うことができた。これからの 3 年間のプログラミング教育の方向性を決めていくことが課題である。	①指導と評価の計画については、研修や会議などの機会を通して、教科内外で情報共有をしながら改善する必要がある。また、現行の教育課程における選択科目の配置について検証し、必要に応じて見直しを行う。 ②プログラミング教育についての研究の研究成果を教科指導の中で生かし、授業改善に向けた意識を職員に定着させていく。 ③これからの 3 年間のプログラミング教育の方向性を決めて研究を推進していく。
2	(幼児・児童・) 生徒指導・支援	①生徒一人ひとりの個に応じた支援体制の充実を図る。 ②生徒の自己存在感、自己肯定感及び自己有用感を高めるとともに自己決定能力を育成し、自己指導力とコミュニケーション能力を身につけられる指導を実践する。	①生徒一人ひとりの状況を的確に把握し、必要な支援を行う。 ②共生社会の一員としての社会性を身につけると共に、生徒の主体的な活動をととして、自己肯定感や自己有用感を向上させる。	①面談等をとおして把握した生徒情報を、担任、学年団、教育相談コーディネーター、養護教諭、スクールカウンセラー等と共有し、必要に応じて外部機関と連携し、有効な生徒支援ができたか。 ②地域との連携活動やボランティア活動への参加生徒数が増加したか。行事で生徒が主体的に活動する場面を増やすことができたか。	①生徒情報を学年会やグループ会議、生徒情報連絡会等で共有し、必要に応じて外部機関と連携し、有効な生徒支援ができたか。 ②地域との連携活動やボランティア活動への参加生徒数が増加したか。行事で生徒が主体的に活動する場面を増やすことができたか。	①支援が必要な生徒に対して、生徒情報連絡会や学年会で情報を共有することにより、個々のケースに応じた支援計画に基づいて支援することができた。SC や SSW、養護教諭、教育相談コーディネーターの連携が効果的である。 ②「おそうじ大作戦」や行事等で生徒が主体的に参加し、地域貢献ができた。 ②地域等からの要請も増えており、部活用や生徒会役員・委員会を中心に協力している。	①生活・生徒支援グループを中心に、学校全体で情報を共有し、チームでの支援体制を強化する。家庭の問題や受験準備により、精神的ストレスを感じる生徒や、人間関係等の悩みが顕在化した生徒などに対し、丁寧な対応をしていく。 ②「おそうじ大作戦」についてはより多くの生徒の参加を目指すため、開催形態等を検討する。 ②今後も可能な限り積極的に協力していく。	①個人の考え方が多様化している状況において、その真意を聞き取り、理解するように寄り添っていくことが大切だと感じる。 ②「おそうじ大作戦」については、多くの生徒が参加して活動できるようになったと感じている。	①「かながわ子どもサポートドック」のの実施が定着し、支援が必要な生徒のニーズの掘り起こしが丁寧かつシステムティックに進められるようになってきた。さらに SC や SSW との連携も軌道に乗り、面談の予約が多くなっている。生徒指導案件に関しても、背景要因として支援が必要なケースも多く、SC につなげることが増えている。 ②ボランティア活動や行事も、コロナ禍以前の状況に戻りつつあり、生徒の積極的、主体的な取り組みが多く見られた。次年度については、様々な工夫を行うことで、体育館の耐震工事に伴う制約を乗り越えた。	①教職員一人ひとりが、生徒の小さな変化を見逃さないように注意深く観察することで、生徒のニーズに気づいて可視化することで、支援へつなげている。担任、学年、養護教諭、教育相談コーディネーター、SC および SSW、外部機関との連携を行うことで、生徒の支援に向けた組織づくりを学校全体で取り組んでいく。 ②体育館の耐震工事がおわり、従来行っていた形態での行事に向けて、従来のノウハウなどが失われていることも多いことが予想されるので、学校全体でその理解し、協力していくことが必要である。また、生徒が積極的に活動するための工夫を行い、さらに主体的な行事運営を目指す。
3	進路指導・支援	①生徒が自己理解を深め、自らの興味や適性を考慮した進路目標を設定し、進路決定に向け、主体に取り組めるよう指導の充実を図る。	①生徒が主体的に自らの進路を選択し、自己理解を深めることができるような指導・支援を充実させる。	①進路説明会の実施等によって最新の情報を提供すると共に、面談等により、生徒の自己理解の深化を支援する。 ①スタディサブリの活用を推奨し、生徒が主体的に自らの進路選択に向き合えるようにする。	①進路説明会や生徒との面談を実施し、生徒に対する支援が適切であったか。 ①進路に関する満足度調査において、85% 以上の生徒が満足と答えたか。 ①スタディサブリの利用者数が増えたか。	①学年や教職員の協力を得て、推薦入試や総合型選抜に向けた、面談や面接、小論文指導等、丁寧な指導を行った。 ①各教科に加えて「総合的な探究の時間」に於いてもスタディサブリを活用するなどした。	① 2 学期に 1 ・ 2 年生の進路ガイダンスを行い、次年度へ向けて意識の啓発を図る。 ①スタディサブリ活用のために、教科担当者からの積極的な発信を促す。	①生徒自身や家庭の考えで、早い時期に推薦や総合選抜で進路を決めて楽になりたいという気持ちも理解できるが、生徒には 5 年、1 0 年先を見据えた進路選択をしてほしい。	①生徒の満足度が高かったことの要因の一つは、生徒が主体的に進路選択を行った結果であると考えられる。今後も引き続き丁寧できめ細かな指導を行っていく。 ①総合型入試や推薦入試、一般入試と多様化する現状において、学校研究や入試研究が求められる。情報収集と共に情報の共有化を図る方策を検討する必要がある	①スタディサポートを利用することで、大学入試の合格ラインを可視化し、より高い目標設定を行う。また、導入済みの様々な進路支援ツールの効果を検証し、使用方法などについてアップデートを行う。 ①生徒及び保護者対象進路説明会の実施方法などを検討し、より実効性の高いものにする。

	視 点	4 年間の目標 (令和6年度策定)	1 年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3 月 7 日実施)	総合評価（3 月 31 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
4	地域等との協働	①地域との協働を推進し、地域に信頼される学校づくりを進める。	①本校の教育活動を積極的に公開することによって、本校への理解を深めてもらう。 ②地域に開かれた学校として、地域と連携した活動を活性化させる。	①学校説明会等をおとして、本校の特徴や教育活動を、中学生やその保護者に理解してもらう。 ①HPの内容を精査すると共に、迅速に更新する。	①アンケート調査で参加者の80%以上の方に満足してもらえたか。 ①最新の情報をHPで公開することができたか。	①学校説明会・見学会等をおとして、本校の特徴や教育活動を、中学生やその保護者に理解してもらった。 ②HPの内容を精査し、迅速に更新した。	①アンケート調査で参加者からご指摘を受けた点について、秋に実施する校内の説明会に活かす。 ②引き続きHPで学校の魅力と特色がより一層発信できるよう工夫する。	①部活動や校風等が周知されており、志願者数も多い本校の知名度は高い。 ②コロナ禍後の自粛解禁の風潮の中で、様々なイベントが再開されている。近隣の小・中学校等との交流が増えていることが実感できる	①今年度は体育館での実施となり、アンケート結果でも概ね満足していただいた。また、夏季休業中には学校見学も行い、中学生にとっての夏休み期間中に実施してほしいというニーズにもこたえている。 ①HPについて定期的な更新を行うことができた。リンク切れのページが時折発生することに対処したい。 ②地域と連携した活動は従来の活動については参加者数を増やすことができた。また、新たな連携・協力として、地域自治体を中心とした活動に加えて、地域企業と連携した活動も実施することができた。	①今年度の学校説明会や夏休みの学校見学をさらに改善することで、参加者のニーズに応えられるように体制を整える。 ①各グループ等が担当するページの情報について、情報の更新と公開期間の設定をしっかりと管理するよう呼びかけるとともに、地域とかかわりのある活動についてはさらに積極的に発信していく。 ②今年度の活動を維持しつつ、参加団体や参加者数を増やすなど、さらに地域との連携を進めていく。
5	学校管理 学校運営	①すべての職員が教育環境の変化に迅速に対応し、前向きに課題に取り組む学校文化を形成する。 ②組織的な学校運営と校務の効率化を図ることで、教員の働き方改革を推進するとともに、教員の不祥事防止に努める。	①高校教育を取り巻く様々な課題に協働して対処できる体制を構築し、実践的に運用する。 ②学校業務について整理・精選、教育環境の整備を行うことで、効率よい校務推進体制を構築する。	①一人1台端末やBYODを活用した学級経営や授業実践スキルを身に付ける。 ②学校業務について整理し効率の良い業務推進体制の在り方を模索する。 ②ICT 機器を中心とした教育環境の整備を行う。	①一人1台端末やBYODを活用した学級経営や授業実践スキルを身に付けることができたか。 ②効率の良い業務推進体制の構築に向け組織再編の準備ができたか。 ②ICT 機器の整備は進んだか。	①電子黒板が設置され、授業だけでなく、校内の情報共有や環境整備に活用している。 ②大地震に備え、より実効性の高い防災訓練のやり方を追求するため防災計画をみ直している。 ②DX ハイスクール指定により ICT 機器等の整備・充実を図った。	①校内ネットワークを有機的に連携させ、アウトプットする力を身につけられるか。 ②DIG の実施方法について、検討している。 ②機器の積極活用を一層進めるとともに、消耗品に係る予算の確保を検討する。	①電子黒板が入り、授業も盛り上がることを期待している。また、教員が電子黒板に書いたことを生徒端末に表示したり、生徒がタブレットに書いたことを電子黒板上で共有できたりするようなシステムがあるとさらに充実した授業ができると感じる。	①各教科がグーグルクラスルームなどのクラウドシステムを積極的に活用しており、情報収集にも役立てている。 ②DX ハイスクール事業で導入した機器によって「校内と職員室の ICT 環境の整備」、「図書館のラーニングコモンズ化」、「行事等のライブ配信の整備」が行われ、職員の業務の効率化や新しい手法を用いた授業実践に向けた準備を整えることができた。これらの機器の効率的かつ効果的な活用方法を研究し、職員で共有していくことが今後求められている。	①改善点や活用事例を共有することで、さらなる利活用を目指す。 ②DX ハイスクール事業で今年度整備された機器の活用方法を研究するとともに、次年度措置される予算によって前年度整備された機能を補完し、業務の効率化を図ることで教職員の事務や授業準備の負担を軽減し、より良い授業が実施できるような体制づくりを行う。